

審議会等議事概要

第2回 滝川市高等学校教育推進検討小委員会 議事概要

日 時	平成20年4月24日（木曜日）午後6時～午後8時40分
開催場所	滝川市役所7階 701会議室
出席者	土居委員長、谷口委員、後藤委員、山田委員、青木委員、河原委員 事務局等：小田教育長、高橋教育部長、早瀬教育部指導参事、吉川学校教育課長、 鳩山学校教育課主査、土橋学校教育課主査
議 事	1 開 会 2 委員長挨拶 3 議事録署名人について ・事務局から、ホームページへの議事掲載を前提として議事録署名人の選出を行いたい、従前より議事録の内容確認は、委員長にお願いしていることから、引き続き委員長に確認いただくこととし、議事録署名人は省略したい旨説明を行った。 各委員承認 4 説明・協議 （1）滝川市内高等学校のあり方に関して ・事務局 - 資料「○滝川市内高等学校のあり方に関して」及び「資料1～10」に基づき、説明を行った。 - なお、資料中「検討事項」の説明の冒頭において、「今後のスケジュールについて」併せて説明を行った。 ○今後のスケジュール 4/25 公立高等学校配置計画地域別検討協議会（第1回） 5/12頃 第3回小委員会（役員会への報告書の内容協議） 5/20頃 役員会 5/26 教育委員会議 5/末 北海道教育委員会への検討結果報告 ○委員意見等 2. 再編検討について （1）総合学科

- ・総合学科というものは、職業学科ではない。説明を聞いていると職業学科という捉えと受け取れる。誤解を招きかねない表現は修正願いたい。
- ・滝川市という地域において総合学科はなじまないと考える。地域のニーズを考えても、今の普通科、商業科、工業科というこの3学科に対する気持ちが非常に強い。これを工業と商業とを総合学科にと言うとハード面も含めてものすごい経費がかかる。財政的な面もあるし、子どもたちもそれを望まないだろうと考える。この地域の子どもたちは普通科志向がかなり強い。総合学科にしたとしても総合学科とは何かということになり、市外の普通科へ流出するということも考えられる。
- ・本来総合学科は普通科の発展である。しかし、荒廃している学校を立て直すため、新たな学校として作り直すといったことで始めたのが道教委の総合学科の最初の取組みであった。従って、本来とは異なった捉え方をされているようである。一番良い例は、アメリカやカナダにおけるハイスクールである。ハイスクール自体は普通科志向であり、普通科から子どもたちの関心が強いということでニーズを拡げていった。自動車があり、コンピュータがあり、美容があり、声楽がありというふうに普通科の中に選択肢がいくつもある。このスタイルが日本に入ってきたのが総合学科のつくりである。日本ではというと、コース制であるとか類型制といって、理科系統、文化系統、就職系統と大きく3つに分けたコースを取ったりして、それにより子どもたちに選択の幅を作っていた。それをもっと今の子どもたちに視点を拡げてあげようということで出来上がったのがこの総合学科という制度である。
- ・デメリットの1つ目については商業科も工業科と同様のことが言える。また、4つ目は実際にそういったことがあると考える。要するに自分たちの成績に適した学校だからという理由で選んでいるようである。
- ・デメリットの5つ目において、実習活動が難しくなるという記載があるが、これは難しくなるということではなく完全に変わってしまう。選択制であり生徒の興味により選択されることから、工業科としての教育は学べない。工業科は積み重ねの学問であるため、かいつまんで好きなものだけ集めて勉強して、工業系列を卒業したといっても、企業は工業人としての再教育を要することとなる。企業の現状を踏まえると、子どもたちを再教育するという体力はないと考える。
- ・よく、高校生は卒業後1～3年間のうちに50%以上が仕事を辞めると言われているが、工業科の卒業生は異なっており、就職後自分の考えと違うからという理由で辞めるという率は非常に低い。そのようなことも考慮した上でこの総合学科ということを考えていかなければ、せっかくそこを卒業しても企業としては使い物にならないということになってしまう。

(2) 学科集合型

- ・滝川西高校には商業だけではなく、普通科もある。メリットの②の中で商業科だけを見た場合には良いが普通科も見たときにどう考えていくのか。普通

科の子どもたちは進学希望が多く、国公立を含めて力を入れてきている。商業科においても進学という気持ちを持った生徒が約7割程度いる。そういったところをどう解決していくのかということも大きな問題であるとする。

※事務局

今、ご指摘のあった部分はまさに、デメリットの②の1つ目にかかることである。滝川西高校においても、普通科や情報ビジネス科は進学という傾向が強く出ていることから、そういった学校経営バランスにどのような影響が出てくるか、長期的な視野から検討したときにはデメリットの方が大きいのではないかというふうに事務局でも率直に感じている。

- ・その辺の文言の整理がきちんとされていなければ、誤解が生じると考える。

※教育長

この部分ということでは、子どもたちの教育にどういう影響が出るのかという視点が少し薄いと感じている。事務局でも学科集合型の経験がないことから、いろいろと具体的なお話を聞かせていただきたい。

- ・学科集合型というものは、まだ分からない部分が多いと感じる。士別で去年から取組みされているかと思う。
- ・学科集合型ということでは、この産業キャンパスをはずした場合には稚内商工高校が商業科と工業科があり、稚内商工のような形で過去に倶知安高校が普通科・工業科・家政科ということでやられていた。やはり子どもたちが少なくなっているということ、それと地域ニーズなどからなかなか上手くいかなかった。同じ高校の中に3つの学科があり、レベル差があることからなじまないということで工業科が閉科の道を辿り、その後女子が多かった家政科が閉科となり普通科単科となった。また、閉校となった江差南高校がある。江差高校時代に普通科、商業科、工業科があって、これもなかなか上手くいかないということで江差南高校が江差高校の校舎を使い、江差高校が新しい建物を作り独立していった。そこにもやはり間口減がらみのことなどがあり、そして子どもたちが少なくなって江差南高校が閉校となった。そういった経過を踏まえてしっかり考えていかないと歴史が繰り返される。

※教育長

逆に言えば成功例が少ないということも言えるのか。

※事務局

学科集合型がどんどん厳しくなってきた上で、そういった学校を総合学科にさらに転換する動きもみられると耳にしたがどうか。

- ・先程お話があったが、総合学科というのは別なものである。学科集合型というのは生徒が減ってきて学校経営が厳しくなったことから一緒にしようとい

う格好でとりあえず統合してやってみたがぜんぜんだめだったというのが大体のおさえである。そういったことの他に新しく今の学校を建て直すためにどうしたらいいかといったときに総合学科という方法もありますということで全道的に今そういった動きが見られているという認識でいる。そういう意味では総合学科のきちんとした検証ということはまだ終わっていない。石狩翔陽高校は順調に動いているがそれ以外の学校ではなかなか生徒が集まらなかったりして、4間口でスタートしたが3間口になったりといういろいろな問題も出てきている。

※教育長

そういったことから、道教委にとっても次善策という意味合いがあるということか。

- ・道教委の総合学科に対する考え方が少し違うように感じる。何校かが集合体になって、そしていろいろなスタイルを作ってそこに子どもたちを集めているいろいろなコースを選択させてあげようというスタイルを総合学科としているように思える。ここで検討されているような専門性を生かした分野でのことまでは道教委でもあまり研究がされていないように思う。だから工業科の触りを教えるならば総合学科でも可能であると思うが、それ以上深いことを学び、実際に企業で使える人材となるかということそうではない。そのためにはやはり、その次のステップを学ぶ必要がある。そのつくりが違うと考える。

※事務局

要は中教審路線としての答申に合った生徒一人一人の興味・関心に応じたきめ細かな教育をしていくという理念が生かされないで、学校の数合わせに用いられている傾向が見受けられるということか。

- ・その辺りに関してはもう少し慎重になるべきかと考える。

※事務局

地域としてはその理念が生きるような地域性かということ、現実的に職業人を養成しなければならぬという使命を担っている以上は、そう悠長なことは言っていられないということもあり、従ってこの地域にはそういった子どもたちの興味・関心に応じたというよりは、脈々と受け継がれてきた積み上げ型の学科の方がなじむのではないかということになるのか。

- ・この北空知の中では、そういう学校を残しておいて、滝川市以外の地域で総合学科を作れる場所がないかということ、地域性を考えたときに可能なところがあるのではないかと考える。そういった地域に総合学科を譲った方が良いのだろうと考える。そして、ここには工業科や商業科、普通科を残しておいて何とかできないのだろうかということを検討する方が良いと考える。そし

て近隣でそういったことができるのであれば総合学科を作り、子どもたちに北空知という中で選択させるということが、かえって幅ができることにつながるのではないか。

※事務局

総合学科を卒業した子どもたちを受け入れられる収容力ということが出口としてこの地域にあるかということも問題とを感じる。この地域というよりは地方自体にそういったキャパシティがあるのかどうか。

- ・職業学科に関して言えば、今市内の高校で行っているような中身のことを学んで、資格取得まで考えていくと、総合学科ではそこまで到達できない。総合学科は広く浅くというものである。

※事務局

そこで得られるメリットは、子どもたちの学習意欲ということになるのだろう。

- ・総合学科の中でも介護福祉士の場合には専科的に学ばせていたが、それも厚生労働省で平成23年頃からすべての単位数を変えようとしており、総合学科で介護福祉士の系列を作っても資格が取れないことになる。そうなると困ることから今見直しをかけている。だから目玉がまたなくなり始めている。

(3) 工業高校の単科校維持による3校体制

- ・デメリットの1つ目の項目に関しては、経験上、あまり影響は受けないと考える。やはり地元志向が強い。また、清水高校の場合には寮というか下宿があるが、そういうところがあって初めて地方から子どもたちが来るようになる。そういった施設がない限りほとんど影響は出ない。
- ・問題はデメリットの2つ目の項目についてであると考え。今後生徒数が減少してきたときに3校のバランスがどうなるのか、ここが一番の悩みであると考え。

3. 結論

- ・「本市の厳しい財政状況を踏まえたときに道立移管による安定的な経営を要することにつながり、市立学校である滝川西高校の現状において市民のコンセンサスを得ることは困難」ということが記載されているが、この意味が良く分からない。

※事務局

工業高校の施設・設備については普通の学校よりも高価なものとなっているが、今、滝川西高校のほかにそういった部分を抱えて、それを維持してまた建替えや更新をしていくということなども考えていくと、市の財政状況を踏まえたときに、道立移管を行い道教委の

経営に委ねていく可能性の方が高いだろうと思われる。しかし、そういったことをすぐに行っていくということは、市立の維持ということを目指して様々な取り組み等を行っている滝川西高校の今の経営状況から言えば、現時点では時期尚早なのだろうと考えているということである。

※教育長

要は滝川西高校と滝川工業高校を一緒にした場合には、市立と道立の学校であることから、どちらかにしなければならないこととなる。これを市立にすることは財政的な負担ということが生じてくるし、かといって市立をすぐに道立に移管することは、まだ市民の理解を得るという段階にはないだろうということである。

- ・ 滝川市の市民の感情としては今の段階では時期尚早であろうと、やはり市立として皆さん期待して育ててきたこともあるという理解でよいのか。
- ・ 厳しい財政状況という前提があるならば、ならば道立移管すべきではないかというのが市民のコンセンサスではないだろうか。

※教育長

滝川西高校が私立から市立となり、滝川市の商業が多いという背景から商業科の必要性が生まれてきて、その中でこれまで市立で行ってきたものを財政的な理由だけですぐに道立移管するということについては、疑問であるとする。

- ・ 私は逆に市の財政的な負担となっているのであれば、早く道立移管によって軽減する方が良いのではないかと感じる。それが多くの市民の考えなのではないだろうか。
- ・ 行政の考える形と市民の考える形ということではいろいろな形があることと思うが、今までそういった滝川西高校に関する市民の声というものはないと考えるがどうか。

※教育長

認識している限りではない。

※委員長

委員のいま言われている方向が市民の多数の意見であるのか、逆に市立でもっとやっていただきたいということなのかは今後確認していくべき事項であるかもしれない。

※教育長

市立としての特色ということでは、単に高校の教育ということだけではなく、地域的な特色ということもあるだろうし、いろいろな部分で市と有機的にリンクして機能していると考えている。これが道立となるとそうはいかない部分が多く生じる。市立だからということではいろいろなつながりが可能となっている。実際に通っている子どもたちは市立、道立という意識の違いがあるかどうか分からないが、市としての関わり方というのは非常に強い部分がある

と考えている。

- ・私が日々感じていることとして、例えば滝川高校も滝川工業高校も見た目も設備もすごく立派であるのに対して、滝川西高校は例えば耐震強度が足りないであるとか、設備も決して立派とは言えない。同じ市民の子どもたちが、同じ授業料を払っているというのであれば、同じサービスを受けさせてあげた方が良くはないかと考える。滝川市の理念を通すためにということであれば、その必要があるのか疑問に思う。あまりにも道立高校と市立高校の差がありすぎるように感じる。

※委員長

環境的な面で子どもに差がありすぎるという1つの意見である。ここで本市の厳しい財政状況を踏まえてということ表現しているのであれば逆にそういった意見も生じてくるということであると考え、そうであるならばそういった表現を修正することが必要であると考え、る。

※教育長

この先耐震改修であるとか大規模改修といったことで費用が生じることは明らかであることから、全く財政的な部分を考えていない訳ではないが、子どもたちにとってということ考えたときに、現状においては今の求められている市立としての滝川西高校を維持していくべきであると考えている。しかし、結論の事務局案において3で表現しているように、おさえては再び再編を含めた検討を要するのだらうということも考えている。財政的な部分としてもこの先小中学校の部分の問題も出てくることから、自ずと市としてその辺の部分は考えなければならない。特に財源的な部分は新タッグ計画の中でそういうものを含めて財政計画の練り直しということが秋口を目途に進められることとなっているので、その中で一定程度は滝川西高校を含めたその部分についてどういう財政計画を持つのかということの中でも、滝川西高校のあり方ということは議論されていくことになるのだらうと考えている。

※事務局

内部で検討したときには、滝川西高校を今道立に移管したいと言った場合に道教委はそれを簡単に受けるのかといったときに、おそらく再編という形でなければ受けないだろうという結論となった。そうなれば今いろいろとデメリットの方が大きいという話になった総合学科であるとか学科集合型という形に変えざるを得ないこととなる。そういうことから、現状ですぐに道立移管ということにはならないであらうと考えている。しかし、今、市立の維持自体が行政にとっての都合にしかすぎないのではないかという意見をいただき、改めてそのような見方もあるということを確認させていただいた。

※教育長

いろいろな思いがあるかと思うが、動きやすさということが市立の場合はあるのでは。

- ・道立とはまた違った動きができる。道は道の動きの中でやるが、市立は市立で市教委との協議の上での動きということが随分ある。

※教育長

道立はどこか1校だけを変えるということにはならないため、変えるとなれば全部の道立高校を同じルールで変えなければならないということになる。そういう意味では機動性があると言えると思う。

- ・全体の限られた教育予算の中で考えたときに、すべての市民の子どもたちが平等で扱われるということからは、小学校中学校の設備充実にもう少し費用をかけるべきであると思うし、そのような教育のエゴを通すために市立高校を抱えるほどの体力のある財政状況ではないと思う。従って、独自性を保つというよりはおしなべて全体を底上げするためにここはリストラするべきではないかを感じる。

※事務局

先程申し上げたように再編を条件に道立移管を受けるということであれば、財政的な議論だけで言えば、苫小牧市での事例であったと記憶しているが、数年前に高校を一つ廃校した場合の経済効果という議論があり、廃校となる学校の教職員の市税や消費への影響をみたときに、年間で数億円から十数億円程度の1校当たりの経済効果の縮減が見込まれるということが言われており、それを滝川市に置き換えたときに再編により学校がなくなった場合には教職員数が減ったりということが出てくることから、その辺のことも考慮すべき話なのではないかと思う。

※委員長

事務局案においても、滝川西高校については決して現状のままではないということが3において再編を含めた議論が必要であるということと盛り込まれていることから、今提起いただいた部分については、またその際に検討が必要な問題であると思うが、それを踏まえて1～3の内容について議論を進めたいと思う。

- ・今指摘のあった文章はやはり分かりづらいと感じることから、分かりやすい文章に修正を願いたい。さらに3において「近い将来学級減の検討を求められることになるのは必至である」という記載があるが、将来なのかという疑問がある。今やらねばならないのではないかと感じている。もっと強い表現を要するのではないか。このような結論であるならばこの小委員会は何のために設置されているのかという気がしないでもない。6月には道教委から配置計画（案）が出されてしまうし、将来で良いのかと考える。この結論は、いろいろ検討した結果まだ検討の余地があるから引き続き検討していこうという趣旨となるが、それほど安直な状況にはないという気がしている。
- ・近い将来と書いてしまうとまだ何年間かあるというふうに捉えられてしまうがここ数年で来てしまうのではないか。逆にここ2～3年などという具体的な記載をした方がはっきり見えてくるのでは。近い将来というニュアンスの

表現ではなく、早急になどより強い表現が必要であると考える。

- ・以前にもお伝えしたと思うが、滝川工業高校の問題については、滝川市だけの話ではないと考える。北学区全体での位置付けとして必要であると考えられる。そうしたときに、4～5学級相当の減となっていることから、滝川市はもちろんのこと北学区全体を考えた学科のあり方と早急にという言い方がより良いと考える。どうしても滝川市だけを考えているように見えてしまうので、この地域として工業をどうするか、商業をどうするか、普通科をどうするかということを滝川市がリーダーシップをとって考えていかねばならない時代であるのかと考える。特に工業は切実であり、2間口ということは存続の上であり得ないと考えることから、地域に工業がなくなってしまうことにつながる。この学科は3間口を絶対に維持するということであれば、北学区全体で工業人を育てるということで深川であれ砂川であれどこにでもお願いするというスタンスが必要であるのではないか。

※事務局

例えば、深川にしても砂川にしても4間口の学校しかなく、1間口減ということは道教委の指針という再編対象に落ちてしまうということを意味する。そういうことから言えば、その決断を他の市にお願いするということは現実的には非常に困難であり、それならば滝川市内で間口を減すれば良いという議論が今でも起きている。例えばそういうことを赤平市などに求めた場合、学校の存続に関わるレベルまで至ってしまうと、それぞれの地域エゴが生じてしまう問題になってしまう。ただし、工業科は地域全体の学科であるという今のお話が非常に重要な視点であることはそのとおりであることから、結論の中に盛り込むべきと考える。

- ・工業科に限らず職業学科というものは、その地域に必ず必要な学科である。ゆくゆくのことを考えたときにここでは滝川西高校のことが文言になって表現されているが、財政面のことを含めてこれをどのように考えるかということに関して我々に答えを求められても何とも言いようがない。ただし、子どもたちにとって何が望ましいのかという視点ではまだまだいろいろな考えも出てくるだろうと思う。従って、先々本当にこの地域の子どもたちをどうしていくかということに視点を置いて、そしてその次に出てくるのがハード面、財政的なことが絡んでくるのだろうと考える。地域の子どもたちをどう育てるか、そしてそれが可能かどうかなのか財政面でみていったときにどうなのか、そういう論議をしていくならば分かるが、これはすべてが一緒になっているから、そこでは先程委員が言われたように1校なくしてしまう方が早いのではないかとということが当然出てくると思う。
- ・今、皆さんの意見を伺いながら、本当に難しい問題であると率直に感じている。事務局からも冒頭で説明があったように、1番の視点として子どもたちのために何が望ましいかということ考えたときに、今の議論は既に子どもたちが中心となっていないような気がする。何故ならばそもそも道教委の新

たな高校教育に関する指針そのものが財政的な発想のものであり、そこからまず無理があるように感じる。

自分も基本的には現状の3つの高校の担っている役割が子どもたちにとって良い役割となっていると考える。よって、理想的なことはこの3校を維持していくことであるとする。

例えば、産業キャンパスであるとか総合学科ということなども検討されているが、そのほかにもフィールド制など様々な形態が発生してきている。中学校という立場で今考えたときに、進路指導が非常に複雑になってきている。率直に子どもたちに理解を求めることが困難な状況である。そういう意味からは昔からの普通科や商業、工業などの職業学科があるということが子どもたちにとって、一番理解が可能となる。新しいタイプの高校は子どもたちも分からないし、保護者も理解ができていない。教員にとっても説明が難しい。そういう意味からも新しいタイプの学校が滝川市に導入されたとしても、子どもたちが消化不良というか自分が望む適正な選択ができるか甚だ疑問であるとする。

しかし、現実的に生徒数が減少してきて実際に今の学校を維持していくことが難しいということも理解する。そうした結果どうすべきかと言うと道教委が示している4～8間口の適正規模ということを満たすために、滝川高校は今6間口あり、滝川西高校は7間口あることから、極論な話であるが、例えば、それらを1間口ずつ減らし、その代わり滝川工業高校の間口減を解消するというのが、単純で乱暴な話であるが3校維持につながる可能性が出てくるのではないかという気もしている。

要は、3つの学校で子どもたちが求めている部分がたくさんあるので、この単純で明快な体制で続けることが一番で、これ以上複雑ないろいろな仕組みを入れることによって子どもが迷うばかりであり、果たしてその後自分の本当に望んでいた高校生活が送れるのか、その卒業後に望む社会生活が送れるのかと考えたときに非常に不安である。

※委員長

本日まとめた意見を最終的に事務局でまとめて、検討結果報告書(案)を作成し、それを次回予定している5月の中旬の小委員会で皆さんに確認していくという予定となっていることから、次回までの間に本日いただいた意見をもとに結論の事務局案を修正して皆さんに配付し、それを更に添削いただきたい。そしてそれをもとに事務局で報告書(案)を作成していただきたいと考えるがどうか。

- ・ 大体出尽くしている感はあるが、道教委としても迫ってきていることから数の論理で工業高校1間口減ということが出されることが危惧される。自分も近隣の学校が閉校されるということを見てきているが、そうなったら、この北空知から工業がなくなったということにならないように、そういったことも踏まえた対応もしていかなければならないということを感じている。

※委員長

本日の皆さんの意見の中で大事なことは、もう緊迫しているということがあったと思う。滝川工業高校は北空知で唯一の工業高校で準拠点校ということもあり、それを消さない形で考えていきたいということが皆さんの気持ちであると感じている。その中で現時点でどうしていくべきかということで一つの案をまとめていきたいと考える。

- ・お願いであるが、資料9「市内中学生の進路状況」に関して、市外の公立高校に出て行った子どもの数が記載されているが、この中で空知北学区に行った子どもとそれ以外の地域に行った子どもの数を知りたいと思う。それと、北学区内・北学区外から市内の3校に何人来ているかということを知りたい。もし、データがあれば教えていただきたい。

※教育長

明日開催される道教委の公立高等学校配置計画地域別検討協議会という会議の資料の中にそういったデータがあることから今その資料をお配りしたい。

- ・滝川に高校がある意義というのはこの学区からいろいろな子どもを集めているということも道教委に訴えていくべきであると思うが。

※教育長

欠員となっているところからは、逆に集めるからそうなるということが言われておりなかなかバランスが難しい。

※委員長

お話があったように、どこかを集めれば、どこかで欠員が生じてしまうということで、北学区で滝川工業高校の欠員を解消するために子どもを集めようとするれば、どこかの学校が消えてしまうということにもつながり、共同でということはなかなか難しいのかもしれない。

※教育長

しかし、中空知の教育長会では工業高校に関しては、そういったお願いはしてきている。また、明日の地域別検討協議会においても2の内容のようなことは改めて滝川市として意見を申し上げようと考えている。

※委員長

なかなか完全に煮詰めるということはこの限られた時間においては、難しいことから、先程申し上げたように最終的に事務局でまとめていただいた案を再度皆さんに配付し、それを更にみていただきたい。そして更に事務局で報告書(案)をまとめていただきたいと考えるがよろしいか。

	各委員承認 ※事務局 本日欠席された委員に事前に本日の会議資料を説明させていただき、意見をいただいているので紹介したい。 総体としては事務局案の内容に賛成であるというお話と、あくまで本来道教委が考えるべきものを市教委に委ねられているという状況であり、身勝手な要求をただ押し付けられて、それについて検討したときに、例えば、子どもにとって望まれないようなそういう方法を採用するということは避けていきたいということ、また、今皆さんからもご心配の声があったように、実際にすぐに1間口減されていくというような部分に対してどのように対応していくのかということ、そして、滝川西高校の経営に関して、校舎がもつ間は市立で維持したいというような受け取られ方をするかもしれないという意見をいただいた。 5 その他 ・次回小委員会日程について、後日事務局より調整を行うこととした。 6 閉会
会議資料	会議次第 ○滝川市内高等学校のあり方に関して ・資料1「中卒者数推移」 ・資料2「空知北学区における職業学科の欠員状況」 ・資料3「欠員状況等一覧」 ・資料4「地元間口・地元進学率」 ・資料5「3 高校進路状況」 ・資料6「西高・工業高校の就職先（地域）」 ・資料7「産業分類別（15歳以上就業者）」 ・資料8「滝川工業高校進路」 ・資料9「市内中学生の進路状況」 ・資料10「小樽工業高校におけるコース制」 ・追加資料「空知北学区 学区の進学者の状況（全日制課程）」（公立高等学校配置計画地域別検討協議会資料）